

地域の生計向上に直結させる植林

「オイスカ」ただ植林をする団体」とのイメージを一部では持たれているように感じています。しかし、タイでは、30年以上緑化を続けてきた北部・チェンライ県のプロジェクトに続き、南部のラノーン県での活動も、現地政府が掲げる政策と、オイスカ10カ年計画のコンセプト「生態系およびビジネスセクターを活用した課題解決（EBS&BB S[※]）」に沿って、住民の生活・生計向上に真正面から取り組む「地域開発プロジェクト」そのものに大きく飛躍しています。

※EBS: Eco-System based solution (自然を守り、育み、その力を活用した課題解決)
BBS: Business based Solution (ビジネスセクターとのパートナーシップとソーシャルビジネスによる課題解決)

20年で取り組みの土台は盤石に

ラノーン県では99年から、タイ政府天然資源環境省と共に、「疎林」となってしまったマングローブ林の再生を開始しました。2004年のイン



2007年、インド洋大津波から3年経っても漁獲高は30分の1に落ち込んだままだった(1回の漁で捕れる魚の量の比較写真。右の赤いかご2つが津波前、中央の小さなかご1つが07年当時)

ド洋大津波では、再生途中のマングローブ林が防災・減災機能を果たしたことで、プーケットや隣接するパンガー県のような人的被害は発生せず、その重要性の理解につながりました。しかし、大量の砂の流入による海中環境の変化から、漁獲量が激減、若年層の漁業離れに直面しました。

そうした問題を抱えながらも、日本国内の法人会員を中心とする多くの方々からのご支援で活動を継続してきた結果、2000ha以上の再生に成功し、若者が都会から戻ってくるほどに漁獲量も回復。タイ国内でも比類のない成功と評価され、現在は「世界自然遺産」登録を目指すまでの森となっていることが、表紙

の写真や下の写真からもお分かりいただけると思います。

ただ、現在はまだ、海側の再生がおおむね完了した段階で、内陸側には、マングローブ林へと再生すべき場所ながら、技術的にもコスト的にも難易度が高いエリアが虫食い状に点在しています。例えば、かつて錫の採掘やエビの養殖をしていた跡地の中には、不法占拠されている場所もあり、現在も法的解決に向けて時間のかかる努力が続けられています。

地域開発プロジェクトに飛躍

21年には、外務省「日本NGO連携無償資金協力」の支援を受けて、「タイ・ラノーン県のマングローブ林再生を通じた社会的弱者層生計向上プロジェクト」(以下、N連プロジェクト)が、3つの島と本土1村を対象に、3カ年計画でスタート。マングローブ林の再生以外にもさまざまな生計向上のための活動を、住民同士の話し合いによって進めてきました。これまでは各世帯がそれぞれに取り組んできたことを、組織化・グループ

オイスカは、1980年に植林活動をスタートさせ、「ひたむきに植林」を続けたことで、近年は植林プロジェクトのあり方が住民の生活向上にも直結しています。そのモデルといえる取り組みが、タイ南部に位置するラノーン県でも進んでいます。2月に同地を訪問した本部・啓発普及部の吉田俊通がレポートします。

(TOPIC)

～超一流の仕事がここにある～

タイ・ラノーンの植林プロジェクトを訪ねて

N連プロジェクトの主な内容

- マングローブ林の再生
⇒ 育苗、植林、管理作業など
- マングローブ由来の商品開発および製造、販売
⇒ お茶、石けん、塗り薬、染め物など
- エコツーリズム
⇒ マングローブ林内をカヌーで散策
- 水産物加工
⇒ エビみそ(アミエビのペースト調味料)、干物など
- 漁具貸出組合の組織化
- ヤギ飼育能力向上とグループ化
- 海洋ゴミの回収と換金施策



4拠点の各グループの会合は合計数百回にのぼる



数々のマングローブ由来新製品を紹介するンガオ村女性リーダー

化・複合経営化することで、収入の年間平準化を図り、各世帯収入の10%アップを目標としています。コロナ禍真っ只中となった初年度は、ロッ

クダウンによりスタッフが島に入れない状況に見舞われるなどの困難もありましたが、当初の計画を順調に満たす成果を上げています。文字にす

参加住民の訪日研修開催

今回の現地視察では、N連プロジェクトを訪日研修生OBが支えていることを知り、うれしく思いました。そして、ニュース(5ページ)でも紹介されている通り、N連プロジェクトの3年目継続の調印式が、3月10日に在タイ日本大使館で行われ、翌11日から最終年度が始まりました。私

るのは簡単ですが、話し合いを避けることなく、根気よく地域住民とコミュニケーションを図ってきたオイスカスタッフと政府側の担当者の地道な努力なしには達成できない目標です。共に現地視察を行った専門家の見原隆明氏が、「死に物狂いの努力」と評したのが印象的でした。

しかし、N連プロジェクトの成功は、この3年で成し得たものではありません。99年からの活動の中でノウハウを蓄積し、行政や住民との信頼関係を築き、それを発展させることでマングローブ植林にとどまらない「地域開発プロジェクト」の実施が可能となったのです。

今回の現地視察では、N連プロジェクトを訪日研修生OBが支えていることを知り、うれしく思いました。そして、ニュース(5ページ)でも紹介されている通り、N連プロジェクトの3年目継続の調印式が、3月10日に在タイ日本大使館で行われ、翌11日から最終年度が始まりました。私



N連プロジェクトでは、オイスカの訪日研修生OBもスタッフとして活躍中上／政府職員としてオイスカとともにマングローブ再生にあたるブーン氏(09年四国研修センター) 下／見原隆明専門家(左)と談笑するエーク氏(右)／03・08年四国研修センター

が担当する宮城県名取市で進む「海岸林再生プロジェクト」とオイスカ・タイ総局が取り組む活動は、互いに足を運び合い、励まし合いながらここまで続けてきました。3月11日を開始日としているのにも春日智実駐在代表や総局の皆さんの思いを感じます。

さらに、今年はN連プロジェクトの一環として、5月12〜16日に、対象4村の住民ら22名による訪日研修を、「海岸林再生プロジェクト」で受け入れることになっています。大津波の被災地であり、漁業が盛んで、オイスカが大規模造林を実施しているなど共通点の多い名取市で、しっかりと

詳細・お申し込みはこちらをご覧ください



<https://oisca.org/events/230516/>

学びの場を提供し、N連プロジェクト終了後も、住民らが継続して活動していけるよう、後押ししたいと考えています。一行の帰国直前となる16日(火)夕方には、22名が語るオンラインのトークイベントを予定しています(14ページ参照)。多くの方に聞いていただき、ラーノンの活動の発展を応援してもらえたらうれしいです。